

ヒエログリフ覚書

著者	吹田 浩
雑誌名	阡陵：関西大学博物館彙報
巻	29
ページ	6-7
発行年	1994-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10112/00024192

ヒエログリフ覚書

吹田 浩

学生諸君と話していると、“できればエジプトで発掘してみたい”という声をしばしば聞く。英語や独語、仏語で文献が読めるわけでもなく、ギリシア語の素養をもっているわけでもないののである。エジプト考古学を勉強するというのであれば、遺物を見る際、欧文文献を用いて正しく評価できる、あるいは、その遺物に書かれたヒエログリフについてもその内容を把握できる、そういうもっと堅実な勉強をしてくれないだろうかと思っている。

さて、筆者は考古学に不案内なので、ヒエログリフについて、日本人として従来の欧米の文法書とは異なったアプローチができないものか以下に試みてみたい。字数の制約があるので、話は単語のレベルに絞る。

周知のように、漢字とヒエログリフは、象形文字である点で共通している。漢字の「日・木・川・鳥・馬」などは説明は要らないだろう。ヒエログリフでも、図1にあるように、何を表しているかは一見して分かる。一つ説明を補足するなら、ヒエログリフのそれぞれに縦棒が入っているが、これは、その文字が「象形」の場合につけられるとされている。

ここで「象形」という語を使ったが、これは、許慎という中国人が『説文解字』（後100年）で漢字のなりたちの原則を分類した「六書」のうちの一つである。漢字は、六書（象形・指事・会意・形声・転注・仮借）によって理解できるとされている。ヒエログリフの場合も、この六書にそって見ることはできないだろうか。

「指事」とは、抽象的な事柄などを示すために点や線を用いたり、象形文字の特定部分に印をつけたりして作られたものである。数字の「一・二・三」は単純でわかりやすい。「上」は、基準線の上に物を置いたもので、「下」はその逆である。「本（もと）」は、木の根本に印をつけたものだ。ヒエログリフでも、図2のように、数字は漢字と同じ原理であり、人が何事か

を否定する際にとる素振りによって「～ない」を示すのも、指事文字になろう。これは、漢字の「非」が、飛ぶ鳥が羽を左右に開く様^{さま}から、互いに背く、の意をもつのに近いように思う。

「会意」は、複数の文字を組み合わせて、一つの文字にしたものである。「困」は、木が囲みにかこわれて枝葉が伸びることができず、苦しむ、の意である。「劣」は説明を要しないだろう。ヒエログリフではよくお目にかかる「与える」（図3）は、手にパンをもって差し出すところからきた会意文字である。

ところで、漢字は一つの単語をあくまでも一つの文字で表そうとするのに対して、ヒエログリフは、一つの単語を複数の文字で表すことができるという違いがある。そのように考えれば、図4が、太陽神ラアを、太陽円盤（ラア）という象形文字に、神を意味する文字（決定詞と呼んでいる）をつけて表すのも、会意文字になりそうだ。

さて、柔軟な言語表現には表音文字が欠かせない。これは「仮借」によってなされる。たとえば、「來、来」は、本来、ライの音をもつ麦を意味したが、同じ音を持つ「くる」の代用として使われた。「東（トウ）」は、本来は両端を紐で結んだ袋であったが、方角の東を表すために使われる。ヒエログリフでは、図5のように、「顔（ヘル）」という語が前置詞の「～の上に（ヘル）」に、あるいは、「口（エル）」が同様に「～へ（エル）」のために使われている。

表音文字が生まれると、意味を表す文字と組み合わせられて、「形声」となる。漢字ではこの種の文字は実に八割以上を占めるとされている。「汁（ジュウ）」「汗（カン）」「銅（ドウ）」「草（ソウ）」などである。ヒエログリフの「下りてゆく（ハブ）」（図6）は、音の記号に続いて、足に関連することを示す決定詞をもつ形声文字といえるだろう。

さらに面白いことに、ヒエログリフは、日本

語の「送り仮名」に当たるものを好んで使う。図7のラア神では、ラアと読む太陽の象形文字の前に、音でラアと補っている。「導く (sšm、セシエム)」という語では、ナイフの文字 (sšm) に加えて、さらにその文字の両側に s と m の音をつけている。このような用法は、関西大学がある「吹田」市を、フキタと読まれるのを防ぐために、送り仮名をつけるようなものである。また、絵文字として、美術的な見地からつけられる場合も多い。

最後になったが、「転注」は、本来の意味が他の意味へと発展したもので、「長」が、本来の、年長者から転じて、おさ、かしらへと、また、「節」が、竹のふしから、けじめへとなったものである。ヒエログリフでは、本来、杖である語が「支配者」になり、供物である語が「満足する」に転じている (図8)。

以上、いかにも強引であるが、漢字の「六書」に当てはめてみた。漢字が単語を一文字で示し、ヒエログリフは複数の文字でつくるという違いはあるが、「送り仮名」の使用もあって、ヒエログリフは、欧米人よりも、我々日本人により身近なのではないだろうか。

【文献案内】○考古学『エジプト考古学のマニュアル』全6巻 (J. Vandier, *Manuel d'archéologie égyptienne*, Paris, 1952-58) —古くはなったが、遺物を扱うための基本文献。○ヒエログリフ『中期エジプト語』(G. Englund, *Middle Egyptian*, Uppsala, 1988) —新しいパラダイムで書かれた初学者向けの文法書。『エジプト語文法』(A. Gardiner, *Egyptian Grammar*, Oxford, 1957) —上記の文法書と併用して使う古典的な文法書。『中期エジプト語のコンサイス・ディクショナリ』(R. O. Faulkner, *A Concise Dictionary of Middle Egyptian*, Oxford, 1962) —さしあって十分に役立つ、基本的な辞書。

図1 「象形」



図2 「指事」

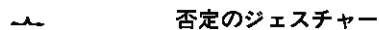


図3 「会意」

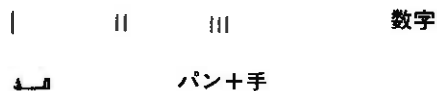


図4 「会意」

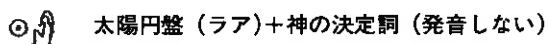


図5 「仮借」

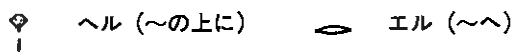


図6 「形声」

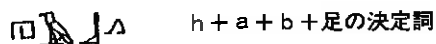


図7 「送り仮名」

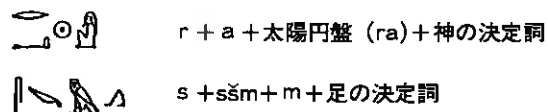


図8 「転注」

